

近代文学 3

近代文学 3

文学的近代の成立

三好行雄^編
竹盛天雄



入門・基礎知識編

有斐閣双書

編者紹介

み よし ゆき お
三 好 行 雄

大正15年生れ。昭和25年東京大学文学部卒業。

現 在 東京大学文学部教授。

たけ もり てん ゆう
竹 盛 天 雄

昭和3年生れ。昭和27年早稲田大学文学部卒業。

現 在 早稲田大学文学部教授。



有斐閣双書

近代文学 3 文学的近代の成立

昭和52年6月10日 初版第1刷印刷

昭和52年6月20日 初版第1刷発行

編 者	三 好 行 雄
	竹 盛 天 雄

発 行 者	え ぐさ ただ あつ 江 草 忠 允
-------	-----------------------

東京都千代田区神田神保町2～17

発 行 所 株式会社 有 斐 閣

電 話 東 京 (264) 1 3 1 1 (大代表)

郵便番号 [101] 振替口座東京 6-370 番

本郷支店 [113] 文京区東京大学正門前

京都支店 [606] 左京区田中門前町 44

印刷 堀内印刷・製本 明泉堂製本

© 1977, 三好行雄・竹盛天雄. Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

★定価は外函に表示してあります。

はしがき

最近の近代文学研究の盛行はまことにめざましく、卒業論文の段階でも、いささか比重を失した近代への傾斜がいわれはじめてからすでに久しい。小説家や批評家など、文壇のサイドからの発言もめだつた現象となりつつある。近代文学が一箇の文学伝統として、〈現代〉を架けて問うに足る意味をようやく瞭然としてきたのであるうか。古典国文学からの相対的独立の問題をはじめ、近代文学史観の再検討、実証と論理の亀裂をめぐる方法論の再構築、新しい言語理論による表現構造論の要請など、刻下の研究者に強いられている重要な課題も多い。文学自体の概念の拡張によって、思想や政治の領域も、いやおうなく文学史（文学研究）の対象と化しつつある。

総じて、戦後に本格化した近代文学研究も三〇年を経て、明らかに重大な転換点を迎えつつある。それは研究方法の多岐な分化と混乱、研究領域の拡大と多彩化などをともなつて、ひとを一種の迷路に踏みまよわせる観さえある。迷路は、月々に量産される膨大な研究論文の数によつても象徴される。とくに研究の第一歩を踏み

だそうとする人びとにとって、氾濫する情報の渦は時として、いたずらな混乱と徒勞を強いるだけであろうし、ことは学生を指導する立場の教師にとっても同断である。

こうした時機に、評論と研究とをあわせて過去の歴大な業績に史的整理をあたえ、その到達点と残された問題を明らかにすることは、旧来の水準を越えて、近代文学研究の新たな発展と飛躍をうながすためにも必須の課題だといえよう。本シリーズは、そうした要請に応えるものとして企画されたが、従来の類書が多く踏襲してきた作家別（ないし作品別）の展望に終始することを避け、ひろく近代文学研究上の核心となるべき問題点を選択し、個々のテーマに応じた史的整理を試みている。テーマの選択は研究者の関心が深く、したがって業績の積みかさねの多い問題を主とし、同時に、研究の進展に即応した新しい課題にも留意した。個々の叙述は原則として、(一)問題の所在、(二)主要な研究業績の史的整理、(三)今後の課題・方向の指示の三点を骨子としたが、テーマによっては、それによりふさわしい叙述がなされた場合もある。

全一〇巻の構成は小説・評論を中心に、ほぼ時代の流れに沿って区分した第1～7巻と、近代および現代の詩歌を対象とする第8、9巻、研究上の重要な主題と方

法を展望した第10巻からなる。現段階で、必要な問題点はおおむね網羅したと信じるが、幸いに、多くのすぐれた研究者の協力を得て、所期の目的を充分に達しえたと自負している。

本シリーズの刊行が研究者、あるいは研究をこころざす人びとへの指針を提供し、そしてまた、ひろく近代文学の読者にとっても鑑賞・享受の一助となりうることを期待したい。最後に、編集から刊行までの過程で、有斐閣編集部の澤井洋紀・千葉美代子・林喜代子の諸氏に多大の援助を受けた。記して謝意を表する。

昭和五二年五月

三好 行雄
竹盛 天雄

*執筆者紹介

(執筆順)

畑 實	(はた みのる)	昭和女子大学文家政学部教授
滝 藤 満 義	(たきとう みつよし)	横浜国立大学教育学部講師
榎 本 隆 司	(えのもと たかし)	早稲田大学教育学部教授
和 田 謹 吾	(わだ きんご)	北海道大学文学部教授
東 栄 蔵	(ひがし えいぞう)	長野県立飯山南高等学校長
寺 横 武 夫	(てらよこ たけお)	滋賀大学教育学部助教授
畑 有 三	(はた ゆうぞう)	専修大学文学部教授
伴 悦	(ばん えつ)	龍谷大学文学部助教授
佐々木雅彦	(ささき まさのぶ)	早稲田大学文学部助教授
森 英 一	(もり えいいち)	金沢大学教育学部講師
助 川 徳 是	(すけがわ のりよし)	名古屋大学教養部助教授
岩 城 之 徳	(いわき ゆきのり)	日本大学文理学部教授
今 井 泰 子	(いまい やすこ)	静岡女子短期大学助教授
橋 本 威	(はしもと たけし)	大阪教育大学付属高等学校教諭
熊 坂 敦 子	(くまさか あつこ)	日本女子大学文学部教授
井 上 百 合 子	(いのうえ ゆりこ)	日本女子大学文学部教授
内 田 道 雄	(うちだ みちお)	東京学芸大学教育学部助教授
小 泉 浩 一 郎	(こいずみ こういちろう)	東海大学文学部助教授
蒲 生 芳 郎	(がもう よしろう)	宮城学院女子大学学芸学部助教授
竹 盛 天 雄	(たけもり てんゆう)	早稲田大学文学部教授
柘 植 光 彦	(つげ てるひこ)	専修大学文学部助教授
河 村 政 敏	(かわむら まさとし)	フェリス女学院大学教授
赤 瀬 雅 子	(あかせ まさこ)	桃山学院大学経済学部教授
藤 木 宏 幸	(ふじき ひろゆき)	共立女子大学文芸学部助教授
渡 辺 澄 子	(わたなべ すみこ)	昭和学院短期大学助教授

目次

はしがき

1 前期自然主義の評価……………畑 實 1

前期自然主義とは(1) 前期自然主義の問題(2) 当時の評(1)(3)
 当時の評(2)(4) 戦前の評価(5) 戦後の評価(7) 吉田精一の意見そのほか(8) 前期自然主義の問題(9)

2 独歩と自然……………滝藤 満義 11

独歩と自然主義(11) 花袋・天弦の独歩論(12) 自然の発見(14) 自然の意味(15) 自然の諸相(17) 独歩とゾラ(18) 自然観の差(19)

3 自然主義の成立……………榎本 隆司 21

新しい回転期(21) 時代の証言(22) 生物的生による反逆(23) 「私小説」論と「破戒」論(25) 朝明けの意識(26) 抗議か告白か(27) 日本自然主義(29) 近代自我史観の再検討(30) 残された課題(31)

4 自然主義の描写論.....和田 謹 吾 33

作品を解く鍵(33) ゾライズムの理解(34) 事実の客観(35) 平面描写(37) 平面描写批判(38) 一元描写(39) 描写論への課題(41)

5 「破戒」と部落解放運動.....東 栄 蔵 43

「破戒」評価の分岐点・対立点(43) 研究史における二つの評価軸(45) 部落解放運動における評価(46) 評価の分極に対する批判(46) 統合的評価への試み(46) 作品のリアリティーと部落問題(48) 統合的評価と部落問題(48) 「破戒」評価における文学と部落解放運動(49)

6 四迷の復活.....寺 横 武 夫 51

帰り新参への熱い期待(51) 同時代の「其面影」評(52) 戦前の「其面影」論(53) 戦後の「其面影」論(54) 現行の「其面影」論(54) 同時代の「平凡」評(55) 戦前の「平凡」論(56) 戦後の「平凡」論(57) 現在の「平凡」論(58) へまっ惚れて而る後意見せよ(60)

7 「余計者」の系譜.....畑 有 三 61

近代社会と知識人(61) 「余計者」の文学的形象(62) 研究前史(63) 『近代文学』派の視点(65) リアリズム論と文学史構想(66) 疎外の意味(67) 新しい状況の中で(69)

8 泡鳴五部作のモチーフ……………伴悦 71

成立過程(71) 現時点の諸問題(72) 「耽溺」出現の周囲(72) 「放浪」「断橋」「憑き物」の評価(73) 「発展」「毒薬を飲む女」の評価(76) 今後の課題・展望(79)

9 白鳥の〈虚無〉……………佐々木雅彦 81

『紅塵』序文(81) キリスト教体験(82) 「何処へ」その他(82) 時代の共感(85) 青野季吉の反撥(87) 戦後の白鳥像(89)

10 秋声の自然主義……………森英一 91

〈生れたる自然派〉(91) トータルな秋声論(92) 野口富士男の『徳田秋声伝』(93) 雌伏期の秋声(94) 「新世帯」の評価(96) 「徹」の成功(96) 秋声の円熟と自然主義の衰退(97) 今後の課題(98)

11 自然主義論の構造……………助川徳是 101

〈明治日本人の最初の哲学〉(101) 三つの戦後批評(102) 「前期」の異質性(103) 自我の構造(105) 抱月(106) 天溪・御風・天弦など(107) 「朝日文芸欄」と折蘆(108) 近代個人主義の文学の思想と方法(110)

啄木の位置……

岩城 之徳

111

一四〇冊を超える啄木文献(111)
 究(114) 戦後の啄木研究(116)

大正期の啄木評価(112)
 今後の問題点(119)

戦前の啄木研

実行と芸術……

今井 泰子

121

戦前の視角(121) 新たな関心(1)——近代文学史の見取図(122) 新たな関
 心(2)——元義の把握が先決(123) 誰が問題提起者か(124) 発端に関する
 諸説(1)(124) 発端に関する諸説(2)(125) 注目すべき吉田精一説(126)
 「実行と芸術」論争形成の経緯(127) 「実行と芸術」論争開始の意味(128)
 「都会」事件の大きさ(129) 今後の展望(130)

口語文体の確立……

橋本 威

132

確立の時期(132) 自然主義と写生文(133) 漱石・鷗外の位置(135) 読
 者との関わり(136) 確立期文体の欠陥(137) 西洋絵画の影響(139) 『白
 樺』派に関連して(139) 今後の課題など(141)

写生文の評価……

熊坂 敦子

142

写生文の発生(142) 成立と推移(143) 余裕と〈低徊趣味〉(144) 〈俳諧
 派〉と〈自然派〉(146) 民俗学の見地から(148) 写生文の展開(149)

もう一つのリアリズム——写生文再評価運動(150) 残された問題点(151)

16

「文学論」の到達

井上百合子

153

文芸科学(文芸学)樹立の試み(153) 同時代の批評(156) 理論と実践
(156) 自己本位の立場(158) 西欧修辞学の修正(160) 「文学論」の現代
的意義(161) 今後の問題(162)

17

漱石と人間存在

内田 道雄

163

問題の輪郭(163) 同時代批評から(164) 人としての漱石(167) 「夢十
夜」の課題(169) 存在論と作品論(172)

18

漱石と「明治の精神」

小泉浩一郎

174

「殉死」という観念(174) 統一的把握への出発(175) 「明治国家」との対
応(176) 作品論的追求の系譜(177) 近代と反近代(179)

19

鷗外と「日本の近代化」

蒲生 芳郎

181

近代日本の百年史さながらに…(181) 近代日本文学の紀元(182) 時代の戦
いの先頭に(183) 「舞姫」の問題(185) 人民および文学の敵?(186) その
双肩に担いしもの(187) 明治末年の鷗外の問題(189) 歴史小説の意味(190)

「灰燼」の中絶

竹盛 天雄

192

現代を描く長編小説への挑戦(192) 何を描こうとしたのか(193) いかに描いているか(196) 中絶をめぐる(198) これからの課題(200)

荷風の美的世界

柘植 光彦

202

「やつし」の作家荷風(202) 荷風の耽美主義の位置(203) 荷風の耽美主義の特質(205) 酔わざるものの酔い(207) 耽美主義と文明批評(208) 「戯作者」への道(209)

明治のデカダンス

河村 政敏

210

世紀末類唐派の登場(212) 異国趣味の人工楽園(213) 過剰な「生」の氾濫(214) 時代への反抗(216) 唐木順三のデカダンス論(218) 類唐派の残したもの(221)

大逆事件と文学

赤瀬 雅子

223

社会運動の生長とその弾圧(223) 大逆事件(224) 記録の発見と刊行およびその評価(225) 平野謙の俯瞰図(225) 臼井吉見の分析(228) 『発禁の詩』など(229) 『アナキズム文学史』(230) 『プロレタリア文学史』(231) 近代文学史および思想史など(231) 新しい研究の諸相(231)

24

新劇の季節

藤木 宏幸

233

「新劇」の誕生——文芸協会と自由劇場(233) 新劇団の簇生——第一期新劇運動(234) 「新劇」の意味するもの(235) 新劇の回顧(235) 新劇史の研究——戦中から戦後へ(237) 第一期新劇運動の評価(239) 翻譯劇の問題(240) 研究の課題(241)

25

〈新しい女〉の実相

渡辺 澄子

243

『青鞥』の創刊(243) 青鞥社に集まった人々(244) 〈元始、女性は太陽であつた〉——創刊号(245) ノラとマグダ評——第二卷(247) 〈新しい女〉の出現(249) 文芸集団からの脱出——第三卷(250) 〈新しい女〉の社会問題化(251) 自由結婚の宣言——第四卷(252) 『青鞥』廃刊への道——第五、六卷(252) 〈新しい女〉の実相(253)

『近代文学』全一〇巻総目次——255

1 前期自然主義の評価

1 前期自然主義の評価

前期自然主義とは

前期自然主義の称呼は島村抱月によって用いられたのが最初と考えられている。すなわち明治四一年一月『早稲田文学』に発表した『文芸上の自然主義』の初めの部分で、自然主義の語をわが小説界に掲げたのは小杉天外であり、その作は「今のいはゆる自然主義中の要素を、少なくとも其の傾向とし目的として含蓄してゐたこと」は間違いない事実であり、その「描写方法の純客観的ならんとすること、題材の肉に及び醜に及ぶを避けざらんとすること等」は自然主義の主要元素であるが、「唯それらの外に、尚一呼吸の合致せざるもの」があるため自然主義を前期後期に分けると述べている。その合致しない点とは抱月によれば、天外の自然主義と今の自然主義との間にはわが国相応のストロールム・ウント・ドラングが介在

していたとし、「今の自然主義は実に此の小ロマンチズムの後に起つた特殊の現象である」と言っている。この規定以後、前期自然主義という称呼はよく用いられるようになった。

では、この前期自然主義とは具体的に何をさすのか。先の文中で抱月は前期自然主義の代表を「天外氏の自然主義」と言っているので、明治三四、五年頃にあらわれた、主にゾラの手法を日本に取り入れた一群の作家たちの作品をさしているものと思われる。瀬沼茂樹は「文学史上の通念として、ほぼ明治四十年代の自然主義文学にたいして、小杉天外、永井荷風などの三十四、五年前後の意識的にゾライスムに立った文学を前期自然主義文学と称している」（『前期自然主義文学』『文学』昭24・9）と言っており、片岡良一はより具体的に、天外の「はつ姿」（明33

8)「はやり唄」(明35・1)、小栗風葉の「青春」(明38・3)、田山花袋の「野の花」(明34・6)「重右衛門の最後」(明35・5)、島崎藤村の「旧主人」(明35・11)「水彩画家」(明37・1)、永井荷風の「地獄の花」(明35・9)「燈火の巷」(明36・7)、二葉亭四迷の「其面影」(明39・10)等がそれを形造る作品であると述べている(「前期自然主義の作品」『思索』昭42・5)。

前期自然主義の問題

この前期自然主義は日本の自然主義とどうつながり、またもっと広く言えば日本の近代文学にどんな役割を果たしたであろうか。島村抱月は『破戒』を評す(『早稲田文学』明39・5)で、「破戒」を「欧羅巴に於ける近世自然派の問題的作品に伝はつた生命」がこの作品の中に発現したと言ひ、さらに「我が小説壇に一期を画するもの、若しくは画せんとしつゝあつた幾多の前駆者を総括して、最も鮮やかに新機運の旂旗を掲げた」ものと評している。ここで言う「問題的作品」とは、先に「問題的文芸」(『東京日日新聞』明39・2)で「低きは貧富問題、労働問題から、高きは、人生問題、道德根本の問題」などを扱ったもので、

ゾラやイブセンのようなものと述べているところを見ると、社会問題を取り扱つたものと考えることができる。抱月はこの明治三十九年五月の段階で「破戒」を作者の意図以上に社会問題を提示した作品と受け取つたのであろう。そう考えると彼が、丑松の告白の場面をマイナスと見ていることもわかる。このように「破戒」をとらえた時、前期自然主義が不十分ながらも持っていた科学主義なり社会批判なりの成熟と考へたのではないか。〈前駆者を総括〉とはこのことを指しているように思える。だが、それから一年半ばかりした前述の「文芸上の自然主義」を書く時には、日本の自然主義の性格が、当初抱月が考へていたものと違ふことを発見し、〈自然主義論に此の作者の名を逸してはならぬ〉といちおう言いながらも、前期自然主義と区別をたてているのである。日本の自然主義を前期自然主義の成熟した頂点とみるか、その発生、展開を別のものと考ええるかによつて、前期自然主義の評価はおのずと違つたものになつてくる。

1 前期自然主義の評価

当時の評 (1)

明治三四、五年に出現した前期自然主義と言われる作品は当時どのような

に評価されたであろうか、二、三の代表的作品の評を通して振り返ってみよう。小杉天外の「はつ姿」について平尾不孤は「写実の意義を論じて天外君の著『初姿』に及ぶ」(『小天地』明33・10)で、天外の写実に対する考えを紹介したのち、「はつ姿」にふれて「叙事に於ては描写の多きに過ぎ、叙情に於ては同情の度を薄くしたり」と評しており、『帝国文学』(明33・9)の批評は、さわどいところまで書くのが写実か、趣向が支離滅裂であり、人物の性格がはつきりしない、会話はよいが地の文はよくないなど述べて、ともに文章、描写の上手下手を問題にしている。ついで「はやり唄」については、『太平洋』の「『はやり唄』合評」(明35・1)『早稲田学報』の「『はやり唄』を介す」(明35・1)などあるが、ともにその写実を買い、同時に無用の人物が多過ぎる、姦夫の出現が唐突である、遺伝と個性の衝突が応分の描写を得ていないなど述べている。天外に関

しては全体に文章のよしあし、その写実の深度というところを取り上げたものが大部分である。

永井荷風の「地獄の花」も数多くの評が出た。高山樗牛は『太陽』(明35・11)の「評論」欄で、この作を近刊の小説中で出色の文学と言いい、さらに作品中で荷風は一種の主張をしようと努めているが、それが「余りに赤裸々であつた。是の主張の骨が目立つに随つて自然の皮肉は如何にも痩せ衰へて見ゆるのである」と評しており、また『早稲田学報』(明35・11)は「予め脚色を作つて後に、之れに応ずる思想を製造したるものなり。これ全編に統一なく、血あり肉ある人物なき所以なり」と批判している。また『帝国文学』(明35・12)は「作者が此の編に由りて描破せんとせしは何ぞ、問ふ迄もなく社界の内面にして闇黒の方面にあり、人生の弱点にして獣欲の方面に存す」と言いい、この研究は人生の光明に達せんがための研究であるというが、作者の結論は社会を無視した傾向がある。人は自由自在な動物と同じ境遇にあつて能く美しき徳を修めてはじめて不変不朽の冠を頭上にいただけると言いが、これは認めがたい